
?Blue Moon?

紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

? B l u e M o o n ?

【Nコード】

N 8 6 3 7 L

【作者名】

紅

【あらすじ】

二十一世紀末、地球を襲った様々な惨劇から人類を救ったのは、政治家でも学者でも勇者でもどこぞの王様でもなく、医者だった。国民から絶大な支持を得て医者地位が急上してから、五十年。英雄の孫、夏淡が日本最難関校である一大に主席で入学を果たす。そんな中、いくつもの仮面を持つ彼は、二度同じ女性が自分の腕の中で死ぬという不可解な現象にであう。

順風満帆に進んでいた彼の人生の歯車が、少し、ずれた瞬間だった。

黒一？（前書き）

出だしが少し残酷です。

その後はそういった描写を入れる予定はありません。

黒一？

暗くて、黒い部屋だった。

何も見えない、闇。ただ冷たい空気と薬品のおいが、その部屋にはたちこめている。そんな光の一切届かない部屋で、静かに座っている男が一人。しかし気配を感じるだけで、その男の姿は見えない。ノックの音がした。弱々しい、音。男が顔を上げた。入れ、と短くつぶやく。

「失礼します…。」

ドアが開いた。外の光が部屋に一筋差し込む。その光で、男が台のようなものに座っているのが分かった。そこに陰をつくったのは、骨のような男だ。丁寧にブルーシートの掛けられたストレッチャーを押している。

「それが今回の実験台か？」

闇と同じくらい冷たい男の声に、骨男は震えあがった。それでもはい、と答え、ストレッチャーを男の前まで押してくる。男が薄く笑ったのが分かった。

「もういい。さがれ。」

骨男に安堵したような表情が浮かんだ。しかしそれを慌てて隠し、一目散に部屋を出ていく。そんな様子をさして気にした様子もなく、男は笑っていた。扉が閉まり、また部屋を闇が支配する。

男はしばらく長い足をぶらぶらさせていた。が、急に思い立ったかのように立ち上がり、乱暴に壁を叩いた。ピツ、という電子音が響き、まばゆい光が円形に広がる。その中心にあるのは、今まで男が座っていた台だ。人ひとりが余裕で寝れる大きさのその横には、手術室のような用具が平然と並んでいる。

光に照らされた男は、彫刻のように彫りの深い端正な顔立ちをしていた。しかし、切れ長のその瞳には、何の感情も浮かんでいない。口元に浮かぶ微笑は穏やかなものではなく、ただ、冷たさをたたえ

ている。

男は無造作にハサミをつかみとると、刃をなんのためらいもなくブルーシートに差し込んだ。心地いいほど簡単に、ブルーシートが切れていく。縦に真っ直ぐ切れ込みを入れ、開く。白い肌が覗いた。男が目細める。

白というよりは蒼に近いその全裸の女は、しなやかで美しかった。男は身体に一瞥くれると、女の顎をくいと持ち上げた。

「綺麗な女だ。」

臉を下ろした女の顔は、血の気がなく、そのせいか人形のような。男は満足したようにうなずき、ハサミを置いた。

そのまま男はかがみこむと、優しい手つきで女を抱きあげた。大事な実験台だ。無駄にはしない。静かに手術台の上に下ろす。光をスポットライトのように浴び、もともと華奢な身体がもっと細く見える。

こんな姿にされているというのに、女は一向に目覚める気配がなかった。試しに男は、女の腕を軽くつねってみた。動かない。きちんと麻酔がきいているらしい。

メスを掴んだ男は、無表情のまま、彼女の肌にそれを突き刺した。

黒一？

鮮血があふれた。

それを見て、男は微笑んだ。たまらぬ快感を覚えながら、下腹から胸まで一気に刃を進めた。先ほどのブルーシートと同じように、切り開く。まだ動く内臓が見えた。そして、この感染症の患者であることを示すように、骨はもろい。軽く握るだけで碎け散るほどに。一夜を共にするのだから綺麗な女がいい。その注文通りの女の様子に、男はひたすら笑みをこぼす。

女の綺麗な身体はたちどころに思わず目をそらしたくなるような残酷な姿に変わった。しかしそれだけのことをされても、女はまだ生きています。普通ならあり得ない。だが、この女はサンプルとして、骨男に頼んでとある薬を全身かけさせてあった。これくらいでは、死ぬこともないだろう。

「そろそろ目を覚まさせるか。」

男はつぶやき、唯一傷をつけていない女の顔に自分の顔を近づけた。唇を重ね、息を吹き込む。ゆつくりと、女が目を開いた。男を見て目を見開き、口を動かす。耳を近づけると、かすれた声が、尋ねた。

「ここは…？」

「きみのような感染者を救うための部屋だ。」

それはあながち嘘ではない。ただ、その助けられる対象にこの女は入っていない。この女を使うことで、他の患者が助かる。けれど、女は素直にそれを信じたようだった。

「よかった…。」

こんな身体にされているというのに、優しく微笑んだ。身体の麻酔はきいているから痛みはない。自分の身体の状態に気付かないのも当然といえる。

今までこの感染症で分かっているのは、空気感染ということだけだ。それも普通の空気感染ではなく、湿度、温度などの気候状況、精神

状態など様々な条件が重なったときだけ感染するという奇妙な病気だった。低い温度を保っているこの部屋で、感染することはまずない。

男はステンレスの台を見た。上には、様々な瓶が置かれている。この医者たちが、この感染病を治すために開発した薬だ。彼の仕事は、その副作用を研究することだ。

男はそのあとしばらく、薬を飲ませては奇妙な動作を繰り返した。それにより、女の状態がころころと変わる。最後に金のラベルの瓶を手にとった男は、微笑んだ。金ラベルは、自信作を指す。

「大田か。自信満々だな。しかし、これなら上手くいくだろう。」
同じ動作を繰り返し、成功、とつぶやく。

それから男は女に声をかけた。

「おい、終わったぞ。」

「どう：でしたか？」

「成功だ。」

「よかった：これで、助かるんですね。」

そうだな、と男は笑った。

「：楽に、してやるよ。」

様々な薬を飲んだこの女を、生かしておくわけにはいかない。男はナイフを持ち、一直線に女の心臓に突き刺した。それから、弔うかのように血まみれの身体ごと抱く。男の腕の中で、女は静かに目を閉じた。

黒一？（後書き）

ここまですが前置きです。

長くなりました。

次話からは、もう少し読みやすくしたいと思います。

無色一？

二十一世紀末、地球を襲った様々な惨劇から人類を救ったのは、政治家でも学者でも勇者でもどこぞの王様でもなく、医者だった。進んだ医学による原因の究明と被害者の処置、被害拡大を防ぐ予防策まで、考え実行したのは先進国の医師たちだった。

それにより地球上での医師の地位は急上した。そして医者の一言で世界が動くようになった。そのためにどこの国でも医民党が結成され、医学は政治と深くかかわるようになった。

日本でもそれは同じだった。人間の命を救った医者たちは国民から絶大な支持を受けた。医民党はすぐさま他の主力党の議席を上回り、国会を我がものにした。もともと医者とは頭のいい者たちになるものだ。国民とのつながりも深い。国民の心理をうまく利用した医者たちの力は、さらに強く日本に広がる。

医者を志す者も増えた。医学大学が次々と建ち、特に国営の医大は各県一つずつ新しく作られた。その中でもっとも難関なのが東京の第一医学大学である。ここへ入ることが、全国の若者たちの一番の目標となった。国の試験を受けると、成績上位で希望する者から一大へ進め、残りは希望にそって各地方の医大へ振り分けられる。万が一逸材をとり逃さないように、試験を受けた者は無償で予備校に入る事が可能だった。

それだけチャンスがあっても、のぼりつめられる医者はほんの一握りだ。いや、チャンスが多すぎるからこそ、確率は低くなっているのかもしれない。医者になるとは、すなわち、総理大臣にも宇宙飛行士にもなれることを指す。子どもの夢のすべて詰まった医者という職は、すべての人の憧れとなったのだ。

無色一？（後書き）

はあ！？という設定もあると思いますが、その辺は経験の浅い初心者の作品ということで見逃してくださいださると嬉しいですよ。

白一？（前書き）

すみません。

学生という身分なので、毎日投稿という訳にはいきませんが…
第四話です。

白一？

「夏淡^{かたん}。」

名前を呼ばれ、その男がゆっくりと振り返った。

一大（第一医学大学）のキャンパス内は、すべて清潔感溢れる白い壁で統一されている。広い廊下の右側からはあたたかい日差しが差し込み、向こうの中庭に春の光の下穏やかな顔をした生徒たちが見て取れる。

その廊下をやはり優しい顔で歩いている男は、綺麗に整った顔立ちをしていた。夏のような他の人にとっては厳しい山も、あっさりと越えられる人になってほしい。そんな思いの込められた名前どおり、彼は何事にも熱くならないような、涼風をまとっている。かつて地球を救ったとき先陣を切った男の孫である夏淡は、今年、主席で一大に入学したばかりだった。

「稜美^{いづみ}。」

夏淡は自分呼んだ女の名を口にした。神聖な、という意味である稜威^{いづつ}からとったという名前の彼女も夏淡と同様、稀に見る美女だ。それはまさに、女神と形容するに等しい。

「久しぶりね。」

稜美は涼やかな声で続けた。夏淡も微笑む。その笑みに、先輩であるはずの二人連れの女学生が、見惚れたように振り返った。夏淡は気にしない。稜美も慣れているようで何も言わなかった。

「お互い忙しかったからな。卒業式以来か。同じ大学だとも知らなかったよ。」

「相変わらず意地悪ね。わたしが一大に入れないとでも？」

彼らは高校の同級生だった。友だち以上恋人未満な雰囲気がある。冗談だよ、と夏淡はまた笑った。

「それに俺もお前も、大学生なんて名ばかりなんだから。」

「研究は進んでるの？」

「ああ。順調だよ。稜美は？」

ふふん、と稜美が胸を張った。

「ウイルス学の研究が成功してね。もう大金持ちよ。」

一大では、優秀な生徒には専用の研究室が与えられる。実験材料も大学負担だ。それに研究内容に応じて助手もつくから、二人は下手な医者よりよっぽど有能と称されている。

「入学試験では主席とられたけど、次の試験は覚悟しておきなさいよ。」

「それはどうかな。俺、主席じゃないと親父にぶつとばされるからな。」

「傷だらけの夏淡、楽しみにしてるわ。」

「いやほんと、笑いごとにならないから、親父の場合。」

夏淡の言葉に、稜美は綺麗に微笑んだ。他の男なら、見惚れるくらいに。

そんな笑顔を見て、夏淡は思った。もし自分のしていることを知っても、稜美は同じように笑いかけてくれるだろうか、と。けれどそれは夏淡にとって、どうでもいいことだった。

赤一？（前書き）

サブタイトルの色は、追う人物の移り変わりを示しています。

同じ色が続く場合は、前話の続きです。

間に別の色が挟まれているときは、場面が変わりますが中心人物は同じです。

様々な人が出てきますが、最終的にはつながる予定ですので、それまでお付き合いください。

赤一？

真っ白な部屋だった。扉も、壁も、床も、天井も、家具も、目に映るものすべてが白だった。けれど、綺麗と感じられない。白の向こうに、別の色が見える。塗りつぶしたようにでこぼこだ。汚いものを必死に仮面で隠したような感じがする。

ペンキと絵具の臭いが鼻につく。立ち尽くす心音の背後で、背の高い男が不思議そうな顔をした。

「どうしたの？」

背の低い心音が、ゆっくりと男を見上げる。飄々としたその立ち姿に、苛立ちを覚えた。しかしそんな心音の心境に気付くこともなく、男は首をかしげる。そんな動作にまた苛立つ。

男が何か言おうと口を開いた。どうせ、入らないの、と聞かれるに決まっている。舌打ちしたい気持ちを抑え、心音は靴を脱いでそこに置いてあるスリッパに足をすべりこませた。男も後に続く。

男はそのままずっと心音の前に出ると、右に曲がり正面の扉を開けた。途端、まぶしい光が視界いっぱいに広がる。

なにをするための部屋なのか、一瞬分からなかった。

キッチンがある。ダイニングテーブルがある。テレビがある。筆がある。絵具がある。ソファがある。皿がある。ドライバーがある。ピアノがある。コートがある。半袖のTシャツがある。ゴミ袋がある。クッションがある。何か白い物体がある。とても一口には言えない様々なものがある。そういうものたちが、正面の大きな窓から平等に、光を受けている。

そして、やはりすべてが白だった。白いシャツに白いズボンの男も、部屋と一体化してしまいうさだ。心音の淡い水色と紺の制服ばかりが目立つ。

部屋の中央には、イーゼルが置いてあった。心音ほどの大きさのキヤンバスが立てかけられている。

心音はそれに寄っていった。下書きなのか、薄い絵具で海と空が描かれていた。海からは、イルカのような鳥が今飛び出さんとばかりに翼をひろげている。そしてその尾っぽには、ヒトデのような生き物がしがみついていた。訳の分からない絵だ。そのままの感想を、夢歌は口にした。

「…変な絵。」

「よく言われるよ。」

キッチンから戻ってきた男がそう言って笑った。手には、氷をつめたレモンティのコップを二つ持っている。それを受け取り、心音は尋ねた。

「どうしてここはこんなに真っ白なの。しかも、塗りつぶしたみたいにデコボコだし。」

「この家が僕のキャンバスだからだよ。」

男は何をためらうこともなく、言った。

「思いついたらどこにでも描きこめるなんて、素晴らしいことだと思わないか？　僕は物忘れが激しいからね。この間描きつくしてしまっただけ塗りつぶしたばかりだから今は真っ白だけど、今度またくるといい。きっと、素敵な絵たちが君を迎えてくれる。」

頭がおかしい。心音は頭を振った。やっぱり、ついてきたのが間違이었다。この、初めて会った、自分の兄を名乗る男なんか。

赤一？（前書き）

昨日投稿したつもりだった分です…

赤一？

姉が死んだ。会ったこともない、姉だった。

姉の存在を知ったのは、一昨日のことだった。久しぶりの電話だった。出掛ける直前だった心音は、慌ててリストバンドをいじった。このリストバンドは、大抵の人間が持っている。人と人をつなぐ携帯電話の役目から、ニュース配信、検索など、あらゆる機能を備えており、着使用中も威圧感がない他防水機能もあるので、肌身離さず傍らにあるといっても過言ではない。この存在により、現代社会では情報回転のさらなる高速化が可能となっている。

「おはようございます。こちらはN市役所ですが、水城 心音様でよろしいでしょうか。」

どこことなく無機質な感じのする女性の声が、そう言った。市役所から連絡を受けるようなことをしただろうか。少し緊張しながら、答える。

「そうですが。」

「依頼を受けていました血縁関係者の調べが終了いたしました。その結果、第一医科大学病院に入院中の御姉様がいらっしゃることが分かりました。名前は…」

女性は続ける。だが、心音にその言葉は届いていなかった。

半年前、両親が死んだときそういえばそんな依頼をした。けれど、時間が経ちすぎていてそんな依頼をしたことさえ忘れていた。仕事の素早いN市役所にしてはおかしな話だ。そして、それ以上に、自分に姉がいるなんて、おかしすぎる。

なおも説明を続けていた女性が、そこで言葉を区切って何うように尋ねた。

「水城様？」

呼びかける声が聞こえたが、心音は無視して一方的に電話を切った。その姉の存在が確かなのかどうか、分からない。できることなら、

今からすぐ行きたい。けれど、第一医科大学病院は思いつきで行くには少し遠かった。それに今日明日は、予定がぎっしりつまっている。入院しているのなら、逃げることもないだろう。

そう思って、第一医科大学病院に行くのを延ばしたせいで、一度も会うことなく、姉は、逝った。

姉の名前を病院で告げると、霊安室に通された。全身に、白い布がかけられていた。

「え…っ。」

漏れた言葉に、看護師が静かに言った。

「今朝、亡くなりました。」

意味が分からなかった。会ったこともない姉なのに、目の前で冷たくなっている。泣くこともできず、ただ、ふらふらと遺体に寄っていた。

顔にかかった白い布をそつとめくる。化粧をしてもらったのか、死んでいるとは思えなかった。生前はさぞ美人だったことだろう。寝顔のように見えるその顔は、自分と血がつながっていると思えないほど美しい。

「お姉ちゃん…？」

つぶやいても、返事はない。

「親族のいない方だと思うと…気の毒だったんです。よかった、最後に妹さんに会えて。」

看護師がそんなことを言った。その途端、怖くなった。姉は、わたしなんかにあえて喜んでいないと直感した。だから、急いで離れる。「どうしましたか…？」

看護師が不思議そうな顔をした。それから、また元の顔に戻る。

「身寄りのない方は、こちらで焼いてしまうんです。そうならなくてよかった…。」

そんなことない。心音は首を横に振った。分からないけれど、恐ろしくて、恐ろしくて、仕方がなかった。

「わたしのことは忘れて…ここで吊ってください。」
気が付くと、心音はそう言い残して病院を飛び出していた。

赤一？

走って走って走って、辿りついたところは小さな公園だった。心音はその公園のベンチに座りこみ、自分の肩を抱いた。あたたかい春の日差しが降り注いでいるのに、ひどい寒気がする。なんなんだろう、これは。

「きつと…死体を見たせいよ。」

自分に言い聞かせるように、心音はつぶやく。人影のない公園では、そんな心音を気に留める人もいない。そのことに、心音はほっとしながら恐怖を覚えた。人のぬくもりが欲しい。誰かに抱きしめてほしい。そう思ったとき、後ろからふわりと優しく抱きしめられた。身体がびくりとはねた。心音は、一度覚えた人の香りを忘れない。鼻に届いたのは、知らない香りだった。

ぎゅっと抱きしめられているため振り返ることも振りきることも出ず、震える声で心音は尋ねた。

「だ…れ？」

後ろに立つ人物は何も答えない。聞こえなかったのかと思い、もう一度尋ねる。

しばらく間を置き、声が出た。

「君の兄といったところかな。」

どこか間の抜けた、のんびりとした声だった。しかしその言葉に、心音はぎゅっと眉を寄せる。

「姉さんの次は兄？ 馬鹿言わないで。わたしは一人っ子なんだから。」

「そんなこと言われても困るな。僕と君は、確かに兄妹なんだよ。」男が腕をほどいた。心音はさっと振り返った。予想外に目の前に現われた顔が、別の顔と重なった。さっきはじめて見た、姉の顔とそっくりだった。息を呑む。

「どうなってるのよ…。」

綺麗な顔だ。けれど表情が緩すぎるために、それが台無しになってしまっている。声と同じで、顔も間拔けだ。男が心音の正面に回る。背だけが無駄に高い。

「かわいい妹が目の前で泣いているのを、兄として見逃すわけにはいかないな。」

「兄、兄って：わたしたち、今日会ったばかりよ。」

「それはどうだろうね。」

ゆるく笑うと、男はさて、と言った。

「こんな外もなんだし、我が家に招待しよう。すぐそこだよ。」
「ちよっ、ちよっと！」

その細腕からは考えられないほどの力で手を掴まれた。引っ張られる。

すぐそこ、という表現は正しく、男は一軒の白い家の前で止まった。
「ここだよ。」

そこに連れ込まれて、まだ十分と経っていない。質問をしなければならぬことはたくさんある。レモンティーのコップを持ったまま壁に寄り掛かっている男に近寄ろうとしたとき、ウィンドチャイムの音が響いた。：メールの着信音だ。

心音は慣れた手つきでメール画面を呼び出した。宙に、画面が現れる。友人の理彩^{りさい}からだ。彼女は今、学校のはずだ。どうしたのだろう。急いで目を通し、呆れた。

タイトルは「I h o v e t i m e」。つまり、暇。本文にはひたすら暇という字が並んでいた。どれだけ暇なのだろう。

仕方なく、心音は返信する。

『訳分かんないことがいっぱい起こってる。あんたにこの状況分けてあげたいくらいよ。それじゃあね。』

適当に絵文字を入れ、心音は送信ボタンを押した。

赤一？（後書き）

展開がいろいろ急ですみません…

黄一？

暇だ。暇すぎて眠くなる。

理彩は机に突っ伏した。呪文語を延々としゃべっているナナコを恨めし気に見上げる。もう、訳が分からない。第一、古文なんてやる意味が分からない。これから生きていく上で、必要とも思えなかった。

まわりの生徒もみな、だるそうな顔で授業をきいていた。けれど騒がしくなることはない。別にこのクラスが優秀だから、という訳ではなく、ナナコはしゃべっている生徒を見つけるとなんでも物を投げてくるから、という単純な理由だ。機嫌が悪いと何でもかんでも投げつける。危険きまわりないし、スピードもかなりあって痛い。が、話さなければナナコは気にしない。それをいいことに、理彩はナナコの時間、メールを送ることにしていた。

無作為にアドレスをいくつも選び、タイトルに「I h o v e t i m e」と入れる。本文にひたすら暇暇暇暇と打ち込んだら完成だ。誰を選んだのかも確かめないまま、送信する。

この時間、みんなは忙しい。だから、返信にはあまり期待はしない方がいい。後でがっかりするのはごめんだ。

メール受信を知らせる小さな音が鳴った。∴綾^{あや}からだ。無題。ため息が漏れる。

『授業中にメールしてくんな馬鹿。』

「∴綾にしては普通じゃん。」

小さくつぶやく。彼女はメールでもリアルでも死ねを連発する。口癖になってしまっているらしい。他にも、人を傷つけることが上手いというか、いい奴なのだが半端なく口が悪い。

これでまた返信でもしたら後が怖い。とりあえずそのメールは無視する。

『あっそ。』

『じゅぎょうけよね。』

『いつものことじゃん。』

『ただいま、留守にしております。あんた以外なら、受け付けるヨ。』

その後もメールは届くが、どれもそっけないものばかりだ。

そしてこともあるうに姉に送ってしまったらしい。他とは比べものにならない怒りメールが一通届いている。

『あんた今授業中でしょ！？　なにやってるのよ、もう……。』

今年優秀な成績で一大へ進んだ姉綾美は、自分とは天と地の差もある。理彩は憂鬱な気分になりながら、別のメールを待った。誰か：こないだろうか。

また着信音が鳴った。今度こそとメール画面を呼び出す。そこに映し出されたのは、なつかしい名前だった。

「心音……。」

心音は、去年、同じクラスで仲が良かった。けれど途中で両親が死に、通学制を通信制に切り替えた。たまに学校にはくるからずっと会っていない訳ではないが、忙しいだろうと思いメールをしにくかったのだ。慌てて本文を開く。

『訳分かんないことがいっぱい起こってる。あんたにこの状況分けてあげたいくらいよ。それじゃあね。』

今の理彩の状況とは違い、心音は忙しいらしい。それが少し羨ましかった。

：あたしも通信制にしようかなあ。そんなことを思いながら、理彩はゆっくりとまぶたを閉じた。

黄一？（後書き）

また新しい人がでてきました。
一応、立場は稜美の妹です。

白一？

稜美と別れた夏淡は、特にあてもなく街へ出た。人ごみは好きではないが、最近深く浸透している通販よりも自分の足で店を回る方が好きだ。様々な店をのぞきながら、一番気に入っている店まで歩く。女の扱いも慣れたものだった。視線をじっと向けてくる女に気付いては、軽く微笑みかける。転びかけた女の手をさっと引いて助けては去っていく。赤くなる女店員と和やかに会話する。そんな夏淡を見た彼女らはきつと、一体どこの紳士なのだろうと思うに違いないかった。

落としたハンドタオルを拾ってやって女に返し、歩き出す。そのとき、鐘の音になった。歩いていった人々のほとんどが立ち止まる。夏淡もその一人だ。人々は手元をいじり、画面を表示させた。

「医民党の楠葉くすばさんが総理になったってさ。」

誰かがつぶやいた。

夏淡のわきを、大切な用でもあるのか男がすごいスピードで駆け抜けていく。それを横目で見ながら、夏淡は画面を読んだ。

今や必需品となっているこのリストバンドは、重要なニュースをことうやって一斉に配信する。地域によってはその合図に市役所で鐘の音を鳴らす。すべての人が平等に情報を得ることのできるこのシステムにより、ショッピングモールなどで大勢の人が足を止めている姿も珍しくなくなった。この瞬間歩いている人の方がずっと少ない。

「楠葉か。まあ、なんとかなるだろうな。」

夏淡はそうつぶやき、動き始めた人の波に乗って歩き出した。すぐに、わき道にそれる。

夏淡の行きつけの店は、少し奥まったところにあった。通りすがりの客はいらない、うちを目指してくる客だけでいい、という少々変わった店長の店だが、品質は確かだ。シックな感じが気に入っている。

この道を曲がれば着く。そこまできたとき、きゃあっという女性の悲鳴が耳に届いた。訝しげに夏淡の眉が寄る。すぐ向こうの道らしい。

なにがあつたのか。夏淡は軽く舌打ちをし、店とは反対側の道へ駆けだした。

無彩色一？

女が一人、倒れていた。

そう狭くない道だが、見通しが悪い。頭の中で、夏淡はそう分析しながら女に駆けよった。

「…っ。」

女を抱き抱えた夏淡は、一瞬、何かひっかかったような顔をした。けれど、女の白いワンピースに咲いた鮮血の花に、その顔は消える。出血量が半端でない。しかし、見た目より重傷ではないようだ。自分なら、救急車を呼ぶ必要もない。夏淡は、自分の中ではじけるものを外なのだからと抑え、女に声をかけた。

女がゆっくりと目を開けた。その顔に、また誰かが重なる。

「僕は医者です。安心してください。」

夏淡がそういうと、女がなにか言うように口を開いた。

「これから処置をはじめます。」

女を地面に横たえる。夏淡がななめにかけた鞆から道具を取り出そうとしたとき、その袖を、白い女の手が掴んだ。

「…どうかしましたか。」

「いい、から。」

弱々しい声で、女がそういう。

「いい？」

「そう。どうせわたしは…もう、助からない。」

「そんなことはありません。今の技術なら、これくらい、なんともありませんよ。」

そうじゃないの、と力なく女は首を振る。

「わたしは…駄目だから。無理だから。無駄なこと、しなくていい。」

女はそう言い、夏淡の手を握った。頬を、一筋の涙が伝う。

「もう…間に合いそうにないから、もし、わたしの死を悲しんでく

れる人が、いたら、ありがとうございますって、伝えてくれませんか。」

夏淡は答えられなかった。手を掴まれているために、作業ができない。振りきればとれるだろうが、そうしたら壊れてしまいそうできなかつた。

女はそんな夏淡の様子を肯定とみたのか、小さく微笑んだ。それから、また口を開く。

「最期に：わたしを、抱きしめてくれませんか。」

なんだこの女は、と思いつつ、夏淡は言われた通りにした。しなくていいという女に、無理やり治療をほどこすこともない。

「ありがとうございます：。」

心のこもらない抱擁だったにも関わらず、女は嬉しそうにつぶやき、そして、静かに目を閉じた。その顔に、夏淡が息を呑む。その綺麗な死に顔は、夏淡が、先日この手で殺しこの腕の中で永遠の眠りについた、感染症の女と同じだった。似ているということではない。

同じなのだ。夏淡は、どんな双子も、きちんと見分けることができる。だから、つまり、この女とあの女は同一人物なのだ。

看取ったはずの女がまた自分の腕の中で死んだという事実には、夏淡は頭を悩ませていた。

だから、気付かなかつた。

一人の少女が、こちらを見て目を見開いていることに。

無彩色一？（後書き）

無彩色とは、白と黒との混色で得られる色のことです。
気付いていた方もいると思いますが、黒と白は同一人物ということです。
…今回は白多めでしたが。

赤一？

「あなたは…お姉ちゃんの、なんなの？」

「双子だよ。よく似てるだろ？ なんせ一卵性なんだ。」

「一卵性？」

心音は眉を寄せる。たしか一卵性は、同性の組み合わせだけだったはずだ。

「ひょっとしてあんた、女？」

「よく知ってるね。」

男：あるいは女、がそう言うてにやりと笑った。

「博学なんだな。医大にでも行くの？」

「は…。女とか、あり得ないんだけど…。」

心音は女を睨んだ。

「怖いな、そんなに睨まないでよ。冗談にきまつてるじゃん。」

「え？」

「僕と姉さんは、世界でも稀な男女の一卵性なんだ。ええと…何組目だったかな。興味ないから、忘れちゃったけど。」

「…。」

心音は中学のときの理科教諭原田を思い出した。原田は、一卵性は絶対に同性だと豪語していた。あんなに自信ありげだったのに、それは嘘だったのかと思う。みんな原田のことが嫌いだったから、もしこれを中学時代に知っていたら、原田に恥をかかせるいい材料になったのに。そう思いながら、心音は頭の中から原田を消した。

「…でも、病院の人は、親族がいなくて言ってたわ。」

「ああ。」

男はうなずく。

「いろいろ事情があって、僕らはついこの間までお互いを知らなかったんだ。でも、僕はお金がなくてね。入院代が出せそうになかった。申し出るのも面倒で、ずっとそのままだったんだけど…さすが

に、死んでも言わないって訳にはいかないし。言おうと思っていたら君がきて、姉さんを『お姉ちゃん』って呼んだ。姉さんの妹なら、僕の妹だ。」

話がややこしすぎて、よく分からない。いや、意味は分かるのだが、それがうまくなじんでくれないのだ。それに不可解な場所が多すぎて、つくり話に聞こえる。それでも、反論するのは面倒で、理解したような顔をした。

「一応聞くけど、あんたたちの親は？」

さあ、という答えが返ってきた。

「親は離婚して、母親が姉さん連れて出ていった。僕は父親と家に残って、父親はだいぶ昔に病気で死んだよ。母親は、今、どうしてるんだろうな。けど、姉さんに親族がいなかったことを考えると、もしかしたらもう死んでるのかもしれない。」

苛々する。なんなんだろう。わたしたちは兄妹だと言うけれど、ではわたしの親はなんなのだろう。この間事故であっけなくなくなったわたしの両親は、なんだというのだ。

頭を抱えた心音は、そこで一つのことに思い至った。すべての元凶である市役所に聞けば、確実な答えが返ってくるはずだ。

まだなにか言っている男を無視し、心音は市役所へ発信した。

赤一？（後書き）

テスト前なので、しばらく更新できません…

赤一？

「こちらは市役所です。」

いつものように、ワンコールで機械的な女性が電話口に出た。

「わたしの両親のことを調べて欲しいのですが。」

単刀直入に要件を言う。いつもならそれでわかりました、と終わるのに、なぜか今日は女性の歯切れが悪い。

「今、市役所は少々慌しく…返答が遅れても？」

「…遅れるって、どれくらい？」

「仕事が一段階つくまでは。一週間から三週間待っていただかないと。」

心音は顔をしかめた。珍しいこともあるものだ。最新式を取り入れている市役所で、仕事が片付かないなんて聞いたことがない。不運というものは重なるということなのだろうか。

「…待つから、お願いします。」

かしこまりました、そんな言葉が返ってくる。沈黙が続き、心音は電話を切った。

顔をあげると、男が心配そうな顔で心音を見ていた。また、姉の顔と重なる。本当にそっくりだ。

「心音？」

そんなふうに声をかけられ、心音は眉を寄せた。

「なんでわたしの名前知ってるの。」

「なんでって…僕の知らないことなんか、ないよ、この世界。」

「…あっそ。」

心音とゆるい声で呼びかけられたのは悪い気分ではなかったが、妙な心騒ぎがした。それを隠すように、尋ねる。

「一応聞くけど、あなた、名前は？」

「僕？^{すみと}僕は澄人。^{ますみ}姉さんが真澄。」

「それは知ってる。」

病院で聞かされた名前だ。それにしても、真澄と澄人とは、確かに双子らしい名前だ。：ネーミングセンスは微妙なところだが、双子ということはずぐわかる。

さてこれからどうしよう。心音の頭の中を、様々なことが駆け巡った。最善の道を捜すが、すべてよく分からない。

「それじゃ、澄人。わたし、あなたといると疲れるみたい。なんか、もう何も考えたくない。もう、わたしと関わらないで。」

結局、そう言い残して、心音は澄人から逃れるように家を飛び出した。

赤一？（後書き）

やっとテストが終わりました（＾－＾＊）／

赤一？

家を飛び出した心音は、そのまま走り出した。方角は街だ。今は一人でいたくない。人ごみの中に紛れていたい。

新情報を告げ鐘が鳴り響いても、無視して心音は走り続けた。どうせろくな情報ではない。確か今日は選挙の日だったから、また医民党が圧勝で党首の楠葉が総理になった、というような類のニュースに決まっている。心音にとっては、誰が総理になろうとあまり違いはなかった。今のこの制度を崩そうなんていう元氣な奴は、まだ、いない。それでいい、と心音は上から目線で思う。

細い路地に入った。あまりにも細く迷路のようなそこは、道路整備の整ったこの辺り唯一の小路だ。走ることもできず、足早に中央道を目指す。そのとき、女の悲鳴が聞こえた。立ち止まる。

《行くの？》

心音の心の中で、誰かがそう尋ねた。

《面倒事に巻き込まれるかもしれないわよ。》

《でも、ちよつと何があったか気にならない？》

また誰かがささやく。知りたい気持ちと、関わりたくない気持ちと、女を心配する気持ちがその声にこたえる。

「ちよつと覗いて、嫌だったら戻ればいい。」

《そう。》

含むような笑い声を残して、誰かが消えた。心音はうなずき、声の方に向かった。

路地を曲がり、そつと物陰から様子を覗いた。男が、女を抱きかかえている。男は背を向けていたし、女は抱えられているしで、両方とも顔が見えない。女が男に襲われたのだと解釈していいのだろうか。ならば、助けるべきなのだろうか。

心音が考えあぐねていたとき、男が女を床に横たえた。その瞬間、女の顔が、見えた。

「——お姉ちゃんっ？ な、んで…。」

真っ蒼な顔で男を見ている女の綺麗な顔は、姉とそっくりだった。

「嘘でしょ、なんでよ…。」

首を振り、目を凝らす。しかし何度見ても、姉は姉だった。

どうしたらいいのか分からなくなってしまうた心音をよそに、男が
ゆっくりと女を抱きしめた。

そして、

その腕から、

見えていた腕が、

急に、

だらりと垂れた。

間があった。心音にはすぐ、状況を理解することができなかった。

だから、心音が叫んだのは、かなり時間をおいた後だった。

声ならぬ声に、男が、振り向く。

しかめられたその顔は、今まで見たどの顔より綺麗で、綺麗だった。

14◆人は交わり始める。

「誰、だ？」

夏淡はその端正な顔をしかめて心音に尋ねた。心音は答えない。否、答えられなかった。

死んだはずの姉だ。生き返ったというのだろうか。そして、また死んだというのだろうか。隠れることも忘れ、離れた場所に立ちつくす。

一向に答えない心音にしびれを切らしたのか、夏淡は女に向き直った。顔は蒼白いが、やはり、まだ生きているようだ。もっとも、医者だから分かる。それがもう、死んでいると。どうするべきか。

動揺することもなく、夏淡は冷静に考える。今見ている少女からは、自分は殺人者に見えているかもしれない。だとしたら、どうするのが最善か。この際、あの女と同じ、ということは考えている場合ではない。

夏淡は女を地面に横たえたと、心音に向き直った。そんな夏淡に向かって、やっと、心音が言葉を絞り出す。

「お姉ちゃんに、なに、したの：？」

「姉？ ああ。あんた、こいつの妹？」

黒い言葉が出て、夏淡はしまったかな、と思った。しかし、こう直に血を見た後では、白に戻ることも難しい。

「ならちようどいい。こいつ、持って帰ってくれ。」

心音の瞳が見開かれる。涙は見えなかった。夏淡は重ねる。

「言っとくが、俺は何もしていない。通りがかりの医者だ。」

夏淡は鞆をあさり、医者証をひらりと取り出す。医者によって生き残った人類にとって、医者権力は絶対だ。ゆえに、医者を偽れないように、医者として認められた者にのみこの医者証が与えられる。なにか怪しければすぐ取り上げられる、持ち続けるには難しいもの

だ。

目に見えて心音はおびえた。その様子に、夏淡は医者証をしまった。

「俺は、こいつを助けようとした。でもこいつはそれを拒否した。

それだけだ。」

自分は関係ない、というように夏淡は立ち上がる。

「大方、誰かに襲われたんだろう。警察にはそう言っとけ。俺のこ
と、話したりするな。患者が不要と言ったから治療しなかったのに、
疑われたら面倒だ。」

かくかくと、心音がうなづく。心音はなにも考えられなかった。た
だこの冷たく無表情な男が怖い。それに、医者も怖い。

「それから。」

思い出したように、夏淡は言った。

「この女の遺言だ。もし、わたしの死を悲しんでくれる人がいたと
したら、ありがとうって、伝えてくれませんか。そう言っていた。」

夏淡は心音の反応を見ることもなく、立ち去った。

——歯車が、音を立てて狂いだす。

14◆人は交わり始める。(後書き)

人々をこれからつなげていくので、ここからは色がちやごちやになる予定です。そのため、サブタイトルの形を変えました。一応、14話目です。

15◆同一人物

荒々しい足取りで大学に戻った夏淡は、そのまま自分の研究室に向かった。

研究室に入り、中から鍵をかける。電気をつけ、棚の方へ歩み寄った。端にある機械にパスワードを打ち込み、棚のロックを解除する。そのうちの一つの引き出しを開け、たくさんあるサンプルケースのうち一つを取り出した。ラベルは『実験台10023』。

彼はそのサンプルケースを机の端に置くと、今度は別の用意を始めた。

分厚いビーカーのようなものに、ガラス棚から取り出したところとした赤い液体を注ぐ。そこにさらに無色の液体と白い粉を混ぜ、最後に氷のような物体を溶け込ませる。それを二つくり、そこにコードらしきものをたらしいれた。コードは、その先の機械につながっている。モニターには、何も映っていない。

そこまで終えると、夏淡はサンプルケースを開けた。中から髪の毛を一本取り出す。それを一方のビーカーに入れ、もう一方のビーカーにはポケットから取り出した髪の毛を入れた。

「双子だったら、俺に分からない筈がない。」

モニターにあらわれはじめた曲線を見ながら、夏淡がそうつぶやく。赤と青の線は、しばらく安定しなかったが、やがて、重なった。

「…は？」

夏淡の眉が寄った。

「同一人物？」

夏淡がつくったこの装置は、人の遺伝子状態を表す。波は人によってそれぞれ違うため、同じ人でなければこうも綺麗に重なることはあり得ないのだ。

「なんなんだよ。両方、ちゃんと死んでただろ？」

生き返りなんて、医者だからあり得ないと知っている。仮にあり得

たとしても、先にみとった方の女はずっと病院にいた。それは看護師に確認をとった。ということは、なんだ？

夏淡は髪をかきあげ、モニターの前に座り込んだ。赤の方だけをピックアップし、詳しく分析する。

「……？　なんだ、これ。」

そこに見つけた小さな異変に、夏淡は脳内の記憶を探った。この形は、

「遺伝子操作の後がありやがる。」

夏淡の頭の中で、疑問がすっと消えた。それなら、ここまでそっくりだった理由も分かる。彼女らは、確かに同一人物で同一人物ではなかったのだ。

「だが、」

夏淡は自分で確かめるように、声に出した。

「クローンなんて、誰がつくったんだ。」

その声は、誰もいない冷たい研究室に響き渡った。

15◆同一人物（後書き）

久しぶりの投稿です。

この夏休み中に完結するといいいのですが…

16◆兄と姉と妹と

夏淡が去っても、心音はしばらく動くことができなかった。

目の前では、綺麗な女が倒れている。でも、もう息はない。その瞳を見せることはないのだと思った瞬間、心音はようやく彼女に駆け寄った。

「お姉、ちゃん……？」

蒼い頬をなでた。病院で寝ていた、姉と同じ顔。心音には、彼女が彼女なのか、よく分からなかった。裏路地のため、人がめったに通りかからないのいいことに、その場に居座り続ける。

どうしたらいいだろうか。警察に連れていけばいいのだろうか。けれど、唯一医者との統合を阻止している警察署は、今やとても信頼できるようなものではない。実質的に、警察として働いているのは、医民党の新手たちだ。

でも、もう医者になんか関わりたくない。けど、警察にいつてうやむやになるのは嫌だ。どうしたらいい。どうしたら、姉を救える。

姉を膝に抱え、心音は唇を噛んだ。

だから、すぐ後ろから自分を呼ぶ声がしたとき、心音は心底びっくりした。

「心音、女の子は唇噛んじゃだめだよ。」

慌てて振り返ると、すぐ横に澄人の顔があった。真摯な瞳に、思わずどきりとする。

「な……んで、ここ、」

「だから言ったでしょ？ 僕に知らないことはないって。」

澄人はなんのためらいもなく心音を軽く抱きしめると、すぐに離れて心音の膝に眠る彼女の頬を掴んだ。

「……もうだめだな。もうちょい長生きしてくればよかったのに。」澄人は、ここでなにがあったのか知っているのだろうか。心音が見上げると、澄人は大丈夫、と笑う。何が大丈夫だというのだろうか。

しかし、何も言えない。

「：まあ、仕方ねえよな。」

澄人は彼女の額をつん、とつつき、さて、と立ち上がった。

「帰ろっか。」

「：え？」

心音はつられて立ち上がったが、彼女をどうするのかと澄人に訴えかける。

「大丈夫、大丈夫。」

澄人はその細腕からは考えられないほど軽々と彼女を抱き上げた。どこへ向かうのか分からないけれど、今は澄人についていくしかない。心音は半分不本意そうな顔のまま、？二人？を追った。

17◆音を語る今。

しばらくモニターを見つめていた夏淡は、ふと思い立って本棚へ向かった。一般人には手を出すことも躊躇してしまうような堅苦しい背表紙が、そこには平然と並んでいる。今の時代になって、紙の本はかなり珍しくなった。知りたいことがあれば別のルートですぐ検索できるし、電子端末の急激な発展もあって、そちらがすでに主流となっている。重要文書もそちらに移された。混乱時に燃やされたこともあり、今残っている書物はかなり少ない筈だ。けれど夏淡は、祖父、父と受け継がれてきたこの書物を処分する気はなかった。様々な言葉が書き込まれたこの書物たちを完璧に写し取ることはできないと思ったからだ。いろいろな思い、も含めて。

夏淡はその大量の書物の中から一冊、取り出した。タイトルは『医療の可能性』。著者は若き日の楠葉——現総理大臣だ。

夏淡は記憶を手繰り、目次に目を滑らせた。一昔前ならあり得ないと笑い飛ばされ即却下になったような無茶苦茶な仮説ばかりの本だ。けれど楠葉は、それを今着実に現実化している。そんな男なら、やりかねない。

「これだ。」

夏淡は見つけたページを開き、ざっと読み返した。

楠葉の仮説はこうだ。人が生まれたときすぐそのクローンをつくって保管しておけば、人は病になったときの完璧なスペアを手に入れることになる。すなわち、病におびえることはなくなる。

どうやってクローンを大量生産するのか、保管の仕方はどうするのか、クローンの持つ自我はどうなるのか、そもそもそれだけの技術が今の人間にあるのか。そういった疑問をすべてはねのけるような意思の強さばかり目立つ文だ。その計画への思い入れは伝わってくるが、肝心な話はどこにも載っていない。

「他の計画もそうだ。楠葉なら、これだって実行させようとするだ

ろう。」

あれが、そのための実験体だということはあり得る。あり得るどころか、十中八九そうだろう。

夏淡は、人権がどうだとかそんな綺麗事を言うつもりはなかった。クローンにそれほど興味はなかったが、もし楠葉の考えていることが実現するのだとしたら、おもしろいことになりそうだと、思う。もし成功すれば、医者の仕事は新薬の開発など必要なくなり、ただ移植の手術だけになるかもしれない。とすれば、医者にいいわるいもなくなるだろう。医学大学に進めるだけの実力があれば、移植はそれほど難しい手術ではないからだ。

「面白いが、俺にはなんのメリットもないな。」

夏淡はつぶやき、にやりと口角をあげて笑った。

18◆楠葉という男

楠葉総理は、今年100歳を迎える医者だ。いくら医療の発展で平均寿命が延びたとはいえど、100歳になってなお現役というのはかなり珍しい。彼の戦友である夏淡の祖父は、面倒だという理由で60を超えるときっぱり引退した。たまに息子や孫に手を貸すことはあるが、それも稀だ。しかしそれは普通のことである。60過ぎれば仕事はしなくていい。それは、生命危機を乗り切った後の今でも国民に強く根付いた概念であるからだ。

医療技術の向上と食の安定が招いたのは、天国ではなく地獄だった。そんな惨劇から、今年でちょうど50年が経つ。つまりそれは、その危機を覚えている者たちのほとんどが社会から引退してしまったということの意味する。10歳前では、記憶もかなりおぼろげだからだ。そういった理由で、楠葉のまわりにはそのころの思い出を共有する者がもう少くなっていた。けれど、楠葉はそこに居続ける。モニターを通して国民に見せる楠葉の姿は、人のよさそうな優しい顔をしている。そこになにかあると勘繰る人は多いが、彼は、そういう人ではなかった。

彼は一途に、人のことを思っている。彼の総理歴が長いのは、その情熱が生み出す政策が国民に広く支持されているからだ。彼が政治に携わってから、日本という国は大きく変わった。

——それだけの力を持つ男だから、100歳の壁など全く関係なかったのである。

19◆澄人

何も言わずに路地を進んでいく澄人は、見た目ゆつくりと歩を進めていてる。それでも心音とのコンパスの差は広く、心音が澄人についていくためには小走りにならなければならなかった。後ろを振り向かない澄人の様子に、別についていく必要もないんじゃないかとは思ったが、姉——真澄をどうするのか気になる。それを知るためには、ついていくしかない。

人通りの多い道に出ると、人々は物珍しそうに澄人を見た。真澄は死んで——見えているのだろうか。それとも、寝ているだけのように見えているのだろうか。どちらにしても、澄人は気にしている様子を見せず、黙々と歩き続ける。

ふと澄人が足をとめた。ついていくことに精一杯で、まわりを見ていなかった心音は初めて自分がどこにいるのか確認することができた。：さっき飛び出したばかりの、澄人の家。

そのまま家に入っていく澄人に、心音も後に続くしかなかった。

途端、ペンキと絵具の臭いに包まれた。二度目とはいえど、眉を寄せてしまう。何も変わらず白い壁は、心音を拒んでいるかのようだった。

心音が立ちすくんでいる間にも、澄人は右に曲がってあの部屋に消えていた。そのことに気付き、慌てて靴を脱いでスリッパを履く。

部屋に入ると、部屋はさきほどとは違う姿をしていた。

部屋の壁三分の一ほどに、鮮やかな色が踊っていた。心音には理解できない、訳の分からない絵がそこらじゅう描かれている。直線だけが何本も並んでいるのもあれば、気持ち悪いキャラクターもいるし綺麗な少女の横顔もある。均一性のないその絵たちに、しばし心を奪われる。上手なのか——と言われるとよく分からないが、つい目をとめてしまうような魅力が、その絵たちには込められている。

「気に入ったのがあった?」

ふいに、澄人が声をかけた。はっとして顔をあげると、真澄を奥のベッドに寝かせたところだった。今まで無視してたくせに、と子どもじみた考えで、澄人の言葉には答えない。

澄人はそんな心音の心境を読み取ったのか、軽く肩をすくめて見せた。

「さっき君が出ていってから、泉みたいに絵たちが浮かんできてね。一日でこんなに描いたのは久しぶりだな。」

澄人は満足げに様子で部屋を見渡した。それを無視して、尋ねる。

「お姉ちゃんは、何なの？」

「やっぱりそうなるよね。」

澄人は笑った。けれど目が笑っていない。笑いの要素はすべて持っているのに、それが笑いに見えない。そんな笑いを、心音は初めて見た。

「どう説明すればいいのか、何を説明すればいいのか、僕にはちょっと荷が重いんだ。もちろん、心音がこっち側にきたいって言うのであれば、一から説明するんだけど。」

「?こっち側??」

「そう。でも心音、医者嫌いでしょ？」

ずばりと言い当てられ、心音は素直にうなずいた。

「この時代にその医者嫌いは致命的だと思うけど、まあ心音のことだから僕は何も言わないよ。ただ、姉さんを語るにはその分野が不可欠ってことだ。」

謎めいたことを言う。こっちへこない?と笑う澄人が怖かった。真澄のことは知りたい。だけど、その手は取りたくない。心音は身震いした。そして、首を振った。

「そんな…医者とまた関わるなんてできない。」

心音の小さな、しかし強い意志を感じ取ったのか、澄人は残念だ、と小さく微笑んだ。

「まあ、その気になったら僕のところへおいで。僕は、いつでも君の味方をしたいと思ってるんだから。」

澄人がどういう人なのか、心音には最早分からなかった。

20◆誘い

夏淡が研究室を出たタイミングを見計らったように、リストバンドが音をたてた。その着信音に、夏淡は歩きながら手元を見る。

父親からだった。すぐに受ける。

「夏淡か？」

「父上？ どういたしましたか？」

丁寧な口調で答える夏淡に、父親がうなずくのが気配で分かる。

「今日、合深^{あみ}が帰ってくる。だから久しぶりに、家族で食事でもと思っ^てな。」

「それはいいですね。」

「ああ。今夜にでも、と思っているのだが、夏淡、今日は大丈夫か？」

「ええ。家族の食事をさぼるほどの用事なんて滅多にありませんから。」

「そうか。それはよかった。では七時に、いつもの店だ。」

「分かりました。」

「また後でな。」

「はい。失礼します。」

父親の方から電話が切れる。夏淡は軽く辺りを見渡してから、薄く笑った。

「親父なら、楠葉のことも知っているかもしれない。」

夏淡の家の食事は美しいものだ。仕事の話はあまり深く持ち込まないが、尋ねればそれなりに答えてくれるだろう。タイミングのよさに、驚くくらいだ。

時計を見ると、ちょうど昼時だった。

夏淡はてきとうにその辺りを歩いていた友人を見繕った。その友人と連れ立って食堂に向かう。

「夏淡、今日はやけに機嫌がいいな。」

「ああ、ちょっといいことがあったんだ。」

「珍しいな。女か？」

「まさか。夏淡に限ってそんなことはないだろ。」

別の友人がびっくりしたような顔で夏淡を見る。

「：ま、そんなところといえはそんなところだ。」

「まじかよ。うわ、他の女が聞いたら泣くぜ。」

「夏淡もとうとう、か。今度紹介しろよ。」

馬鹿話をしながら食堂へ向かう。そんな夏淡の顔には、意味深な微笑が浮かんでいた。

21◆合深

夏淡が車を降りると、ちょうど別の車からも人が出てきたところだった。辺りは薄暗いが、その立ち姿を見れば夏淡にはそれが誰だかすぐに分かった。

「合深！」

呼ばれた男が振り返る。そんな彼に、夏淡は間髪入れず抱きついた。

「っわ：夏淡？」

「おかえり！」

夏淡は他の誰にも見せることのない、無邪気な笑顔を浮かべる。

「：ただいま。元気だった？」

「もちろんっ。」

合深は、180を超える夏淡よりも更に背が高い。兄弟というだけあって顔はよく似ていたが、合深の方が夏淡より全体的にやわらかい。けれどそれは、彼自身が醸し出す優しい雰囲気のせいなのかもしれないなかった。

「久しぶりだね。一大、主席入学だって？ おめでとう。」

「ありがとう。」

名残惜しそうに夏淡が合深から離れた。合深は苦笑して、ぽんぽんと夏淡の頭をたたく。

「夏淡は変わんないね。」

「そうか？」

「うん。最近同僚が冷たくて困ってるんだ。」

「嫉妬？」

「ま、そうだね。お互いデキがよすぎて困るな！」

嫌味もなにもこもらないさらっとした物言いに、夏淡もうなずく。

「合深が嫉妬されるなんて珍しいな。」

「なんで？」

「俺ならともかく、合深は人がいいから。周りに認められてるだろ

？
」

「まあ今まではそうだったんだけどね。今いるところはみんなプライド高いから。」

そこまで言って、合深は軽く指を鳴らした。

「ま、こんな気分暗くなる話ここで終わり。久しぶりに会えたんだしさ。」

合深の腕が夏淡の肩にまわる。

それでようやく二人は、店の中へ入っていった。

22◆絵

＊

何を思ったのか、澄人はしばらく心音の様子を楽しげに見つめていたが、ふと立ちあがって、イーゼルに新しいキャンバスを立てかけた。

「ねえ、絵のモデル、やってみない？」

「…は？」

突然口を開いた澄人に、心音は訝しげな顔をした。

「いい絵が描けるんじゃないかなと思って。」

「…なんで？ 描くなら、姉さんの方が美人だしいいんじゃないの？」

「俺は死人は描かないよ。」

静かに言った澄人に、心音は驚いて顔を上げた。そんな心音に、澄人はふっと笑いかける。

「僕は、心音を描きたいんだよ。」

「…好きにすれば？」

「ありがとう。」

澄人は、綺麗に微笑んだ。その姿は、心音が思わず、自分を描けばいいのにも思ってしまうほどだった。鉛筆を持った澄人に、心音は尋ねた。

「…どうすればいいの？」

「ああ、別にどうもしなくていいよ。あくまで君を描くだけで、君を描く訳じゃない。」

意味が分からない。心音がそう思ったことを読み取ったのか、澄人はさらに続けた。

「とにかく、ポーズをとるとか、そういうことはしなくていい。好

きにしてていいよ。」

それだけ言うと、澄人は真面目な顔になってキャンバスに視線を落とした。

好きにしていっていいと言われても、することなんてない。あてもなく壁の絵を目でたどっていると、メールの受信を告げるチャイムがなった。

「誰？」

つぶやきながら、それを開く。目の前に浮かんだ名前は、

「理彩。」

文面は、久しぶり、とか、そういう内容のもだった。さらに、もし時間があったら会いたい、というようなことが書いてある。その誘いの言葉は、彼女のはずむような口調そのまま、声が聞こえてくるようだった。

「：そうだね、久しぶりに会いたい。」

心音はそっと微笑んで、返信ボタンをクリックし、文章をつくって送信した。

「楽しそうだね。」

ふうっと息をついたときそう声を掛けられて、心音は肩をびくりとさせた。

「：なつかしい友達から、メールがきたから。」

「それはよかったね。」

本当にそう思っているのか、澄人の視線が上がることはない。けれど澄人は、泉のように更に言葉を紡いだ。

「僕にはなつかしむべき友人なんていないからね。」

「：今、いくつなの？」

「歳？ さあ、まだ十代だったはずだけど。」

「さあって：。」

「興味がないからね。」

心音には、自分の歳を知らない澄人が理解できなかった。

「っていうのは嘘で、まあ、わたしが何歳なのかは知っているけど

ね、それは大した問題ではないと思うんだ。だって百歳まで生きること当たり前なこの世界だ。人生なんて長すぎる。その長い人生の半分にだって達さないというのに、歳を数えてなにを得するのか。大人になるのが待ち遠しかった小学生でもないしね。」

五十年前のその後、医大が重視されるようになってから、日本では十八歳を成人とするようになった。ということは、澄人は十八か九ということになる。

「…そんなもののな。」

ぽつりと尋ねた心音に、澄人はくすりと笑った。

「これはあくまでわたしの個人的な考えだから、あまり信じない方がいいよ。世界には、人生は短すぎると言う人だって少なくないしね。でも僕は、そういう人は無駄に生きているんじゃないかと思うよ。」

絵を描いているせいなのか、澄人はさっきから一人称がばらばらだ。しかし澄人自身は、そんなこと、気にもしていないのだろう。

「できた。」

ただ、そう言って手を止めた澄人が、心音にはやっぱり理解できなかった。

22◆絵（後書き）

…すみませんでしたあ！

夏休み中に終わらせるとか言っときながら、結局何カ月放置してたのか…

まあ、待ってる人もいないでしょうが…（x|x;x）

実はわたし受験生だったわけで、この半年必死に勉強しておりました（嘘）

——まあ、無事、志望校にも受かって、また更新はじめたいと思います。

今までのを読み返してみたら、下手すぎて泣けてきました。

でも修正ができるレベルでもないの、そのままいきます。

間があいたので、話がかみ合わないところがあったらすみません。

そして相変わらず駄文ですが…

23◆家族

＊

店内に入った二人は、奥の個室に通された。そこにはすでに二人の両親がいて、仲睦まじい二人の様子を見ると幸せそうに笑った。

「合深、夏淡、久しぶりだな。」

父が、目を細めて言う。

「はい、父上。」

「ええ、お元気そうでなによりです。」

兄弟は父に向かって一礼すると、母に微笑みかけてから優雅な仕草で椅子に座った。

父はその様子を満足げに見てから、横に控えていた給仕に声をかけた。

「いつものを、4人分頼むよ。」

「かしこまりました。」

給仕が、深く頭を下げる。そして、音も立てずに部屋を出て行った。扉が閉まるのを見ると、父は夏淡の方を見た。

「夏淡、主席入学、おめでとう。」

静かに言った父の目には、医者 of 厳しさはまざっていなかった。ただ、息子を称える優しい光が宿っていた。

「ありがとうございます。」

夏淡は背筋を正し、深く礼をする。そんな夏淡に、母親も祝福の言葉述べた。

「あなたの活躍は教授の方たちからもよく聞くけれど、とても素晴らしいわね。」

「父上や母上、兄上に比べれば、わたしなど足元にもおよびません。」

「夏淡は上手いなあ。」

合深がくすりと笑った。

「本当のことを言ったまです。」

実際、夏淡の家族たちには目を見張るものがある。父は世界的に有名な製薬会社の社長であり、母はその会社の新薬開発室を仕切る管理者だった。合深は医者不足な発展途上国を飛び回る若き希望であり、感染症などの新薬を次々に開発している。

もともと夏淡も、そんな三人と並んでも引けを取らない天才ではあった。学生の身ながら、その判断力と知識には一大にいるすべての者が舌を巻く。彼が卒業後どんな道に進むのかは、世界中の医者注目の的だ。

「夏淡は昔から謙虚ですからねえ。」

母がそう上品に笑ったとき、扉が開いて給仕がワインのボトルを右手に持って入ってきた。

給仕は音もなくテーブルに歩み寄ると、失礼します、とつぶやいてすでに置いてあったワイングラスにそれを注いだ。軽い白ワインだが、よい香りが部屋に満ちる。

四人分を注ぎ終えた給仕は、また一礼して静かに部屋を出て行った。その姿を見送ると、父がグラスを手にした。それに倣い、三人も同様にグラスに手を伸ばす。

「我が家に、乾杯。」

「乾杯。」

「乾杯！」

「かんぱあい！」

三人の声が重なり、一層和やかな空気が、『和やかでない』者を含む彼らのまわりに流れた。

24◆病院

＊

授業が終わると、理彩は鞆を引っ掴んで教室を飛び出した。まだ誰の姿も見えない廊下を駆け抜け、階段を二つ飛ばしで下る。そのままの勢いで下駄箱まで走り、上履きを脱ぐのももどかしくローファ―に履き替えると、閑散とした自転車置き場の1番端にあった水色の自転車に飛び乗った。

電気自動車が改良されてより使いやすくなった今、自転車を使っている人など街ではほとんど見かけない。けれど、理彩はこの、自転車で風を切っていく感じが好きだった。さつき会いたいと言ってくれた心音を荷台に乗せて坂を下ることが、どれだけ楽しかったことか。心音の嬉しそうな叫び声を思い出しながら、ただひたすらペダルをこぐ。

そして三十分ほど無心でこぎ続けていると、ようやく目的地が見えてきた。

第一医科大学病院。優秀な人材の集まる一大の付属施設であるが故、そこは日本一といっても過言ではないほど環境が整った最先端の病院である。その清潔感漂う病院に一直線に滑り込んだ理彩は、小さな駐輪スペースに愛車を止めると、ホテルと見紛うような立派なドアをくぐり、院内に足を踏み入れた。

広いロビーには、診察を待つ人が大勢いる。その合間を縫って、理彩はエレベーターの呼び出しボタンを押した。チン、とレトロな音をたてて、すぐに扉が開く。無人のそれに乗り込むと、理彩は最上階のボタンを押した。

僅かな違和感も感じさせず、すぐにエレベーターは最上階につく。静かに開いた扉から外に出ると、理彩は迷うことなく廊下を進み、

ある一つのドアの前で立ち止まった。

最上階には、様々な事情を持った人たちが、大金を払って入院している。

たくさん並ぶドアと同じように、そのドアにも金持ちなのだろう人の名前が表示されていた。その下に、理彩は慣れた手つきで自分の手を押しあてた。理彩を認証したらしく、ドアが音もなくスライドする。

理彩が室内に入った。そして、理彩はドアが閉まったのを確認してから、白いカーテンを開け、奥に入った。

そこにあるベッドには当然、その金持ちの姿があるはずだった。しかし、ベッドに人の影はない。

けれどそんなことを気にした風もなく、理彩はクローゼットに歩みより、その戸を開いた。

微かに軋んだ音が部屋に響く以外、音はない。

クローゼットに光が差し込む。その光によって、クローゼットの内側があらわになる。

そこには、ひっそりとした階段が、どっしりと構えていた。そして、理彩の姿は、その中に消えた。

パターンと、戸が閉まる。

無人の室内に、その音だけがやけに大きく響いた。

25◆姉妹

カツ、カツ、カツ：

階段をのぼる冷たい足音に、彼女は目を落としていた資料から顔を上げた。ちらりとモニターを見れば、よく見知った顔の少女である。彼女は僅かに微笑むと、その少女を待つべく手に持っていた薄いパネルを、机の上に置いた。

ほどなくして、ポン、という軽い音が鳴った。少女が入室許可を得た音である。それと同時に、素早く正面の壁が消え、水色の制服姿の少女が現れた。

「瑞原さん。」

少女が呼んだ。瑞原と呼ばれた女は、黒で埋め尽くされたこの息苦しい部屋には似つかわしくない、清楚な白いナース服に身を包んでいた。少女を見た途端、その顔が綻んでその服にふさわしい優しい笑顔をつくる。

「いらっしやい、理彩さん。」

理彩は部屋をぐるりと見渡した。瑞原が腰かけている黒い回転ソファと、黒い机以外に、その部屋にあるのは茶を用意するための簡素なキッチンと冷蔵庫のみだ。部屋もそれほど広くはなく、十畳といったところである。

「姉さんたちは、部屋？」

「ええ。」

瑞原が手を伸ばし、机のはじにあったボタンを一つ押した。

「稜美さん、理彩さんがいらっしやいました。」

『理彩、入って。』

声と同時に、理彩が入ってきたのとは反対側の壁が消え、続く廊下が出現した。

「じゃあ、行ってきます。」

「はい、いってらっしやい。」

いらっしやいと言った後にいつてらっしやいと言うのも変な話だと思いつつ、瑞原はまた綺麗に微笑み、ひらひらと手を振った。そんな瑞原に笑いかけ、理彩は足早にその廊下へと向かって行った。

廊下はさして長く続かず、すぐに一つの扉の前に辿りつく。理彩が開ける前に、その扉は一人でに開いた。

その途端。

「リサっ。」

中から飛び出してきた人影に、理彩は抱きつかれていた。

「んっ…、ちよっ、」

なんとか後ろに倒れ込むことは回避し、その細い腕を掴んで引き離す。

「いきなり抱きつかないでっっていつてるでしょ。」

「ゴメンナサイ…。」

途端、しょぼんと項垂れる少女。その少女は、理彩と瓜二つだった。ただ、その少女の方が少し、理彩よりも幼い。

「理彩ー？ さっさと入って。」

奥から聞こえた声に、理彩は慌てて少女の手を引くと、部屋の中に入った。

そこには、外とは一変、まぶしいほどの白の中で、機械をいじる女性の姿があった。

「いらっしやい。久しぶりね。」

そう言いながら振り返ったのは、この世のものとは思えないほどの、美女。

腕に絡みつく少女の頭をなでながら、理彩は稜美に向かって笑顔をつくる。

「元気そうでよかった。」

「ええ。今のところ問題はないわ。わたしも安心してゐるの。本当はそろそろ日の光にあててあげたいところなんだけど、そこはまだ安全の保証ができないから実行できてないのが、今の悩みの種よ。」

「太陽…。でも、外に出るのは、」

「ええ。危険すぎるわ。この子はとっても弱い。外の空気なんかに触れたら、高熱を出すでしょうね。」

稜美は軽いため息をついて、理彩にじゃれつく少女を見つめた。病的とも言えるほど白い少女の肌は、明るすぎる光の下で、部屋に同化してしまいそうだった。

「人が生きていくうえで、日の光を浴びることはとても大切なことなの。もちろん、当たり前のように暮らしているわたしたちが、実感することはないけどね。」

理彩は軽く唇を噛んだ。

彼女は、ただ、自分の分身である少女が、そんな普通の生活を送れないことが、悔しくて仕方がなかった。

26◆夕食にて

＊

食事も進み、会話が途切れたとき、夏淡はいたって自然にその話を持ち出した。

「そういえば、また楠葉さんが首相になりましたね。」

「長いよなあ、あいつも。」

真っ先に反応したのは、合深だった。

「合深、あいつだなんて。」

母が軽く戒めるが、合深は気にした風もなく笑った。

「じじいっていうよりはいいと思うけど。」

「まあ、合深にとっては祖父のようなものだからな。」

合深と楠葉は、仲がよい。他人同士のそれではなく、本当の祖父と孫のようだった。たまたま父の会社に来ていた楠葉に合深がなついたことが始まりで、合深は幼い時から、楠葉本人によって医者になるための手ほどきを受けていたからだ。

「それで、今日、久しぶりに楠葉さんの未来計画の本を読んでいたのですが：あの人は、本当に、突拍子もないことを思いつくものですね。」

「彼の頭の中は、誰にも理解できないからね。」

父がそう言って笑う。

「でも、それを実現させる力があるから、天才なんだよな。」

「本当よね。昔は誰も想像もできなかったことが、今当たり前になっっていたりもするんですもの。」

母も重ねた。

「：それで、読んでいたら、面白い話が載っていたんです。——クローンをつくる、って話なんですけど、実際、可能なものなんですか？」

「ああ。そう言えばそんなのあったな！」

合深が愉快そうに笑う。

「まあ、今の技術じゃそう難しいことじゃないんじゃないの？ 法律なら、じじいの変えられるんだし。」

「確かに。ただ、人間が人間をつくるということはかなり重い。まだ人間が踏み入れている領域ではないとわたしは思うよ。」

「でもじじいなら、やりかねないけどな！」

合深、とまたたしなめてから、母が思い出すように言った。

「そう言えばもう結構前の話になるけれど…、クローンをつくったって言って、問題になったことがあったわよね。ほら、若い男が…。」

「ああ。だいぶ前じゃないか？」

「そうね。合深…は分からないけど、夏淡が生まれる前くらいじゃなかったかしら。」

「話だけなら聞いたことがあるよ。」

合深もそう言ったが、夏淡は初耳だった。やっぱり自分はまだ勉強が足りない、心の中で自分を叱咤する。

そして、それにしても。と思った。

自分が出会った女たち。彼女らは、自分と同じくらいの年齢だった。とすれば、そのときにつくられたクローンなのだとすれば、辻褄が合う。ならば、楠葉は無関係なのだろうか。

その事件について、後で詳しく調べてみよう。

夏淡はそう決め、笑顔をつくった。

「そんなことをする人もいるんですね。」

「独りでできるんだから、財産も才能もあったんだらうに、もったいないことするよな。」

「お前はそんなことになるなよ。」

「努力はするけどね。」

くすくすと合深が笑う。すべての人を巻き込む、そんな合深の笑顔が夏淡は純粹に好きだ。しかし、合深が、一体自分のどこまでを知

っているのか。

夏淡はふと考え、いまはまだこの家族の美しい景色の中に、溶け込んでいたと思った。

27◆旧友

＊

久しぶりにそいつに、電話をかけた。

会いたい、というと、そいつはやけに明るい、そして以前と全く変わらぬ飄々とした声で待ってる、と言った。

「僕にも、なつかしむべき友人はいたんだね。」

高校時代の同級生、様々な事情で実際には一つ年上である澄人は、夏淡がチャイムを鳴らすとそう言いながらドアを開けた。

「…何の話だよ。」

「いや、こっちの話。ほら、入って。」

底の読めない笑顔を浮かべたまま、澄人はそう言ってさっさと家の中に引っ込む。澄人はまた背が伸びたようだ。合深とどっちが高いだろうか。そんなことを考えながら、夏淡は一つため息をついて、絵具のにおいに満ちた空間へ足を踏み入れた。

リビングへいくと、壁の半分ほどに、様々な絵が踊っていた。夏淡は、澄人の絵が嫌いではない。だから、ここへよく来ていた頃は、日々変わりゆく部屋を眺めることが好きだった。夏淡の定位置は中央に置かれた長椅子で、いつもそこに寝そべって澄人と取り留めもないことを語りながら、コーヒーを飲むのが日常だった。

しかし、夏淡は、部屋へ入っても長椅子へ行くことなく、入り口のところ立ちつくしていた。

夏淡が来ると聞いて準備していたのだろう。コーヒーカップを二つ手に持ってキッチンから出てきた澄人が、不思議そうな顔で夏淡を見る。

「座らないの？」

「お前…、」

夏淡は軽く目を見開いていた。その様子を見た澄人は、ああ、と原因に思い当った。

澄人はカップを机に置くと、肩を震わせている夏淡に近付き、躊躇いもなく、抱きしめた。

「っ…。」

夏淡が小さく息を漏らす。澄人はその背中を、落ち着かせるようにゆっくりとしたリズムで叩いた。

「悪かったね。でも、ここにはない。大丈夫だから。ゆっくり深呼吸してごらん。」

澄人が強く夏淡を抱き寄せると、夏淡は言われた通り、ゆっくりと澄人のおいを吸い込んだ。

繰り返していた短い呼吸が、徐々に穏やかになっていく。

「…落ち着いた？」

しばらくして澄人が尋ねると、夏淡はうなずき、いきなり乱暴な仕草で澄人から離れた。

「くっそ…。」

「相変わらずだなあ。」

澄人はひらひらと手を振る。

「お前がいると…っ、駄目、なんだよっ…。——てか、また危ないことしてんじゃ、ねえよな。」

「そんな人聞きの悪いこと言わないでよ。僕は一般的な人間だよ？」
「どこの一般人が、家にこんな、血の、においを溢れさせてるってんだよ。」

「心配しないで。今回ののはたまたまだったからさ。」
今におい消すからね。

澄人はそう言いながら、ほんの少し前まで自分の姉が横たわっていた場所に、水に溶けていた絵具をぶちまけた。赤中心だったらしく、薄いピンクに近い液体が、シートに広がる。

「お前、それ、寝るとき、」

「大丈夫。今はここでは寝てない。別に寝室はあるから。」

澄人はにこりと笑い、夏淡の頭をなでた。

「心配してくれてありがとう。君は本当に優しいね。」

「離せっ。」

夏淡はそんな澄人の手を振り払う。

「俺のこと優しいなんて言う奴、お前くらいだ。」

「それは違うよ。君を優しいという人間は、たくさんいるでしょう？
ただ、本当の君を知っていて、なおそういう人は、そういないかもしれないけど。」

澄人はやわらかく笑い、カップを夏淡に差し出した。夏淡はそれを大人しく受け取り、ようやく長椅子に座って口をつける。

「わざわざ僕のところに来たのには、それなりの理由があるんだろう？」

相変わらず深い笑みを浮かべたまま、澄人はそのすぐ隣に腰をかけた。

27◆旧友（後書き）

突然ひらめいて、夏淡と澄人を同級生にしてしまいました…

若干BLっぽい気がしなくもないんですが、気にしないでください。彼らはただの友人、といってもいいのかわかりませんが、そういう仲ではありません。

ただ、澄人の前では弱くなる夏淡が書きたかっただけです。

夏淡のキャラが迷子でごめんなさい。

最初と全然イメージが違うような…

気にしないでください…

28◆相談

「…別に、何でもないんだ。」

夏淡は、ぽつりとそう言った。澄人は目を細め、黙って夏淡の言葉を聞いている。

「ただ、お前の家に、毎日来ていたのに、それがなくなって、別のところではただ自分を偽って、何が何だか分からなくて、自分が何をしてるのかも、分からなくなって。」

澄人は優しい目で夏淡を見た。

「自分がしてること、間違ってると思うの？」

「正しいことではないことは、分かってる。」

「僕は賛成なんだけどな…。」

澄人はそう言って少し真顔に戻る。

「たしかに君のしていることは、道徳的でもないし医者がとるべき行動でもない。でもそれは、同時に人を救うものでもある。すべての命を救うなんて無理な話だと、わたしは考えているからね。」

もつとも、と澄人は続けた。

「医者がすべての人を助けることができれば、それは素晴らしいことだと思うよ。でも実際問題それはまだ、理想論でしかない。ならば、犠牲は少なく一直線にその理想郷に向かうべきだ。」

夏淡は、コーヒークップを両手で包んだまま、澄人の声にじっと耳を傾けている。そんな夏淡の様子を見て、澄人は声の調子を変えた。

「…そういうば、あの感染症の薬はどうなった？」

「——成功、した。今、大量生産されて使用がはじまったところ。」それはなりよりだ、と澄人は微笑む。

「それにまあ、あんまり自分を責めなくていいと思うよ。例えば目的が自分の欲望を満たすためであっても、君が命を救った患者が大勢いることは確かだ。曲がりくねった道を進んでいたなら、確実に半分は命を落としていたはずの患者たちを、ね。」

夏淡はゆっくりとうなずいた。そして、少し顔を上げる。その顔が、一点を見つめて、ぴたりと止まった。

「ん？ 何か興味深いものでもあった？」

澄人は夏淡の視線をたどった。その先には、イーゼルに立てかけられたキャンバスがある。

「…ああ。」

それか、と澄人は笑う。

「それ、気に入った？」

「…いや、なんか、よく分かんねえ絵だなと思って。」

「僕の絵がそうなのは、何も今にはじまったことじゃないだろう？」

「そうなんだけど、なんつうか、目が離せないっていうか…。」

その絵は澄人が、妹を描いたものだ。しかしそこには、少女の姿はおろか、人間とわかるものさえない。

一冊の本が開いた状態で描かれている。そこに、どこか遠い外国の言葉がつづられている。ただ、それだけの絵だ。

けれど少し目を凝らせば、背景のように薄い色で描かれた線が見えてくる。それらは様々な形をしていたが、一目見ただけで、その形が一体何を考えているのか、痛いほど分かってしまうという奇妙なものだった。

更に、逆に目を離してみれば、全体が一つの渦を描き、ある文字に吸い込まれていっていることも分かる。

「…心が、呑みこまれていく気がする。」

ぽつりと夏淡がつぶやいた。

その消え入りそうな言葉に、澄人は軽く眉を寄せて息をついた。

「夏淡が俺にそんなこと言うなんて、相当まいってんの？」

かもしれない、とやはり夏淡は気弱にうなずく。

澄人は困った、と言いながら頭をかいた。そして、いきなり立ち上がると、夏淡の前に立って尋ねた。

「…描こうか。」

その瞬間、夏淡は大きく目を見開いていた。

28◆相談（後書き）

中途半端に終わりました…

29◆出会い

「俺を…?」

「そう。夏淡を。」

澄人はわずかに微笑みながら、しかしその陰に疲労をにじませて言った。そんな澄人の姿を見て、夏淡の揺らいだ瞳がはっと力を取り戻す。

「何言ってるんだよ。それは、」

「でも、夏淡、辛いんだろ?」

澄人はあくまでも優しく、夏淡に語りかけた。夏淡は言葉に詰まって口を開閉した。しかし、もう一度息を吸って、首を振った。

「…だって、それは、過去の俺を裏切ることに、なる。」

高校の入学式で、夏淡と澄人は出会った。

その学校は、一大合格者日本一を誇る超エリート校だった。毎年全国から優秀な中学生が集まってくるそこはしかし、勉強一筋ではなかった。医者になるために必要なのは様々な体験であるというのが、校長の方針だったからだ。

だから、スポーツなど部活動も全国大会級であるため、入学してくるのは、選りすぐりの本当の天才たちばかりだった。

夏淡は、なんの問題もなく、そこに主席入学する、はずだった。

それなのに、その「当たり前」は実在しなかった。彼より上の人間が、同じ学年にいたのだ。

夏淡はそいつの名前を、入学式で知った。

入学初日、入学式という横看板の下壇上に立っていた、そいつ。

「…ということを誓います。医新37年、4月5日、新入生代表、

五十公野^{いそみの} 澄人。」

穏やかな声で言いきった、そいつ。

その学校では、主席入学者が新入生代表の言葉を読むことが慣例だ

った。だから、夏淡より頭がいい奴とは、そいつのことであつた。初めて感じた劣等感に、夏淡は半ば睨みつけるように澄人に目を向けた。そして、…言葉を、失った。

自分が大勢の目を引く容姿をしているという自負はあつた。けれども澄人は、それとは全く別の種の、人を惹きつけるオーラを醸し出していた。

すべてを包み込むような優しい笑顔。すらりとした体軀。茶色がかつた髪は少し長めで、中性的な印象を覚える。

とにかく、彼の前で悪いことなどできないと感じさせるような、先月まで中学生だったとは思えない、そんな魅力を感じさせる男だつた。

…しかし実際のところ、彼の本性は全く違つたのだが。

夏淡は何かに憑かれたように、放課後澄人の元へ行つた。そしていきなり話がしたい、という、澄人はやわらかく笑つてうちへおいで、と答えた。

夏淡はうなずき、そのまま電車を乗り継いで澄人の家へ行つた。

電車の中で、何を話していたのか夏淡は覚えていない。だが、気付けば澄人の家の前に立っていた。

当時から、澄人の家があれほど異様だつたわけではなかつた。

確かに、部屋中に絵具のにおいが満ちてはいたが、壁に描くなんていう酔狂な真似は、まだ、していなかつた。ただ、部屋のいたるところにキャンバスが置かれていたので、絵はいくらでも目に付いたのだが。

その不思議な絵の中心の長椅子を勧め、紅茶を手渡してから、澄人はそれで？と尋ねた。

「何？ 僕に聞きたいことって。」

僕、という一人称を聞いた瞬間、夏淡はわずかに鳥肌がたつた。直感的に、「こいつはそういうやつなんだ。」ということを思った。もっとも、そういう奴が一体どんな奴なのか、具体的に言葉では表現できなかったのだが。

そんなことを思いながら、夏淡は口を開いた。

そして、夏淡の記憶はそこで途切れる。その後自分が一体何を尋ねたのか、夏淡は覚えていない。ただ、澄人の巧みな話術に引きずられて、誰にも話したことのないような本音が溢れ出て、初めて人前で泣いたことは鮮明に覚えていた。

そして、澄人は嗚咽を漏らす夏淡に向かって、言った。

――描こうか、と。

意味が分からず夏淡は困惑したが、澄人の真っすぐな目に、うなずいた。

その後体験した気持ちは、今でも覚えている。

澄人がキャンバスに触れるたび、ささくれた気持ちが穏やかになっていった。心地がよくて、そのままその感覚に身をゆだねた。綺麗な川を、流れに身を任せて下っているような、そんな心境だった。まるで自身が清浄化されていくようなその時間は、あっという間に過ぎていった。

そして、やがて澄人が一言、つぶやいた。

――できた。

夏淡は澄人を見た。

そのとき夏淡が見た澄人の顔は、ひどくやつれていた。

30◆治療

「…何をした？」

夏淡は尋ねた。ひどく気分のない自分と、疲れた顔の澄人。彼が絵を描いているときに、感情が入れ換わったとしか思えなかった。しかし医学に生きる夏淡は、オカルトじみたものなど信じていない。感情を操るなんて芸当、できるはずがない。脳に直接刺激を与えればどうにかなるのかもしれないが、そんなことをされた覚えはなかった。

——『治療』だよ。

澄人が答える。眉を寄せた夏淡に、澄人は微笑んだ。

——君もやるだろう？ 患者を元気にさせること、それが治療だ。

「俺は…病気じゃ、ない。」

夏淡はうなるように言った。

——そうだね、確かに君は『病』ではない。けれど、『病気』、気の病ではあるんじゃないかな。

日本語のささいな違いを指摘され、夏淡は軽く言葉につまる。

——『病』と『病気』は、本来違うものだよ。『病』は身体のことだからどうしようもない。でも、『病気』は気の持ちようでなんともなる。その『病気』を治せるのが、僕の特技ってわけ。

「『気』を治す？ そんなこと、どうやって、」

——できるよ。

澄人はあっさりと答えた。

——僕にはできる。絵を描くことによって、ね。

「…代わりに、自分が辛くなって、か？」

夏淡の言葉に、澄人が驚いたような顔になった。

——どうして、そんなこと。

「きつそうな顔、してるから。」

ぽつりと答えた夏淡に、澄人は泣き笑いの顔になった。

——困ったな。そんなこと、初めて言われたよ。

澄人は、軽く目を伏せる。

——僕に描かれた人間は、その心地よさに、まわりが見えなくなつて、僕の状態なんて気にもとめないのに。∴君は、変わった人間だね。

「∴お前に、言われたくない。」

それから、夏淡は澄人に言った。

「その絵、捨ててくれ。」

——え？　だって、まだ見てないよね？

「だからだ。俺はもう、お前に描いてもらったりしない。」

自分でも考えていないことがするすると口から滑り出て、夏淡自身がびっくりしていた。

しかし、澄人はもつと驚いた顔をしている。

——本当、不思議な人だね。

軽くため息をついてから、澄人は何もためらわず、カッターナイフでその絵を切り裂いた。

その作業を無感情にやりながら、澄人は抑揚のない声で言った。

——この力は、僕が生まれたときからあった。だから、今までずっと描き続けて、人を楽にしてきた。それが一体どういう原理なのか、僕にも分からない。だから知りたいんだ。それを知るために、僕はあのわざわざ学校へ行っただよ。

「別に、楽になることが幸せじゃねえだろ。」

澄人がくすりと笑う。

——∴そうだね。あの学校に言った目的は、それだったけど。

——君に出会えて、よかったよ。

だから、俺は、俺が澄人に描かれることを、許さない。

30◆治療（後書き）

過去長くなってしまい申し訳ありませんでした。
この二人を書くのが、なんか楽しくて：

31◆再会

＊

一瞬、彼女だと、分からなかった。

理彩の知っている心音は、長い髪をして眼鏡をかけた、どちらかと言えば大人しめの子だった。そして頭の回転が速く、クラスメイトから一目置かれていたような、そんな存在だった。

そんな彼女と仲が良くなったのは、単に入学したとき席が近かったからという理由だったのだが、とにかく馬が合い、いつも一緒にいた。

だから、外見があまりに変わっていても、心音だと分かったのかもしれない。

心音は、その黒髪を肩まで切って、明るい茶色に染めていた。コンタクトにしたのか、眼鏡もない。しかしその姿はとても彼女に似合っていて、また、彼女を大人っぽく見せてもいた。

その姿を見たとき、理彩は、大きな差をつけられたような気がした。心音はあんなに綺麗になったのに、わたしは、何も、変わっていない……。

そんな劣等感を振り払い、理彩は明るい声で心音を呼んだ。

「心音ーっ。」

ななめを見ていた心音が、ゆっくりとした動作で振り返った。その綺麗な瞳が、理彩の姿を捕える。その瞬間、どこか人形じみていた彼女の顔がほころび、花が咲いたような笑顔になった。

「理彩っ、久しぶりっ。」

彼女が学校に通っていたころと変わらないテンションで、心音が理彩に抱きつく。二人はしばし再会の喜びを分かち合ってから、どこ

か照れたように離れた。

「ごめん、嬉しくって、つい癖で…。」

「いーよっ。あたしも嬉しかったし！」

理彩はにかつと笑うと、心音に尋ねた。

「それで、一体何があったの？」

「もう、理彩。気、早すぎだよ。とりあえずどっか店はいろ。」

心音は困ったように笑ってから、理彩の手を引いて歩き始めた。

「どっか行きたいところある？」

「んーん、別にない。心音のおススメで。」

「そういうのあんまないんだけど、まあいいや、近くの喫茶でいい？」

「うん！」

日曜日の街は、明るくにぎやかだ。友達同士も、カップルも、家族連れも、やさしい太陽の下、綺麗な笑顔を浮かべている。そんな日常に今、自分が溶け込んでいることに気付いて、理彩は少し憂鬱な気分になった。

彼女は、この下に、これないのだと思うと。

それは仕方のないことで、理彩が何を言おうと変わることではない。でも、それでもやはり、こうした生活をしている中でふと、考えってしまうのだ。どうして自分が外にいるのだろう、と。

自分と比べると、外と触れ合っていないということもあるのだろうが、彼女はどこまでも素直で、優しい。裏のない笑顔で、嬉しそうに笑う。誰からも愛されるような、そんな彼女。比較したら絶対、わたしが閉じ込められるべきなのに。

漏れそうになるため息を押さえ、理彩は前を行く心音に、弾んだ声で話しかけた。

32◆巡る想い

理彩の手を引き、明るく笑いながらも、心音は内心戸惑っていた。会えば当然、わたしのまわりの諸々を話すことになるというのは分かっていた。分かっているのはいいのだが、何をどう話せばいいのかわからない。そもそも、一体どこまで話せばいいのだろう。あるいは、どこまで話していいのだろう。

ここ数日の出来事は、普通の世界を生活している理彩にとってみれば、あまりにも異常すぎた。

2人の同じ死んだ姉に会って、兄と名乗る男に会って。変なアトリエを訪ねて、絵を描かれて。あと、美形すぎる冷たい医者にも会った。まあ、彼は、それほど変わったことでもないと思うが。

選んだ喫茶店はすぐそこだ。話は全然まとまっていないのに、もうついてしまう。どうしてもっと、他の場所を提案しなかったのだろう。遠ければ、もうちょっと考えていられたのに。

けれどそれと同時に、無理だとも思った。どこか返事が上の空な心音を、理彩が少し不思議そうな眼で見ていることに気付いていたからだ。長い間一緒にいた理彩だ。これ以上、生返事で済ますわけにもいかない。

「ここだよっ。」

「へえ、お洒落なところだね。」

心音が立ち止まると、理彩が感心したような声を漏らした。

「このあたりの道はよく通ってたけど、こんなところに喫茶店があったなんて全然気付かなかった。」

「あんまり目立たないからね。でも、ここのコーヒーはかなり美味しいよ。」

言いながら、心音は喫茶店のドアを押した。

店内は、現代では珍しいカウンター式テーブルがまだ使われている。他に窓際に丸い机が二つと、奥に個室が二つある。たったそれだけ

の狭い店だが、シックな雰囲気だ。まとめられた調度品は、どれもぴったりとその場に馴染んでいて、落ち着く空気を醸し出していた。店内には常連らしき男とカップルが一组、それぞれカウンター席と窓際席に座っている。

そしてマスターは、カウンターの内側でコップを磨いていた。人のよさそうな、中年の男である。心音はここによく来るようで、彼女を見とめると、軽く目を細めて会釈した。

「いらっしゃい。」

「こんにちは。」

「今日は、友達を連れてきたんだね。」

「そう。元クラスメイト。」

こんにちは、と理彩も挨拶をした。マスターは優しい笑顔を浮かべた。

「ちょっといろいろ話したいから…、個室、空いてる？」

「ええ。好きなほうをどうぞ。」

心音はうなずき、理彩を振り返った。

「コーヒーでいい？」

「あ、うん。」

「お腹空いてない？」

「うん、平気。」

「わかった。」

そして再びマスターを見る。

「晃さん、いつもの二つ。」

「分かりました。後ほどお持ちします。」

おいしいのをよろしくね、と心音は笑い、理彩の手を引いて個室へと入った。

32◆巡る想い（後書き）

何だったんでしょうか、この長い間は。

最近忙し過ぎて、気が付けばもう2ヶ月と少し…

急に思い出しました。。。

しかも、それだけ空いてこの中途半端な区切り。

23話は書いたまま2ヶ月放置されていたものだったので、話の中にも間があるし加筆する気になれませんでした。

紅自身も、この先どう発展させていくか曖昧ですが…

お時間があればこれからもお付き合いください。

33◆神

＊

「君は、変わらないね。」

澄人は微かに微笑み、夏淡のすぐ隣に腰を下ろした。

「せっかく、君が描けると思ったのにな。」

「…まるで、俺を書きたかったみたいない草だな。」

「実際そうだよ？」

ため息交じりに言う夏淡に、澄人は彼を真っすぐ見つめて言葉を返す。

「人の苦痛を吸ってまでして、か？」

「そんなこと言わないでよ。綺麗なものを描きたいっていうのは、芸術家の性なんだよ？」

それにさ、と澄人は続ける。

「僕、この間妹に会ったんだだけ、」

「は!？」

澄人の言葉を遮り、夏淡は目を見開く。

「妹がいたなんて話、聞いたことねえぞ!？」

「それはそうだろうね。僕も、ついこの間知ったばかりだから。」

「…お前が知らないことがあったなんて、信じられねえけどな。」

「そんな胡散臭そうな目で見ないでよ。本当のことだよ？」

澄人は軽く肩をすくめてみせた。

「…まあ、そんなことはいい。それで？ その妹がどうかしたのか？」

「そうそう。その子をね、僕、描いたんだけど、苦痛、移らなかったんだよね。」

「は…?」

夏淡が目を見開く。

「あー、その顔いいなあ。普段はクールな美形の素。」

「茶化すなよ。…それで、どういうことだ？」

「さあね、僕にもよく分からない。ただ、彼女から苦痛が抜けたことは確かみたいだね。だから私が思うに、私の力が進化したのではないかと思うんだ。つまりは、苦痛を吸収するのではなく消滅させることが可能になったということだけだ。」

「なんだよそれ。仮にそれが本当だとしたら、お前神になれるぜ。」

夏淡はソファ―に背中を戻し、神候補の友人から視線をそらす。

「神、ねえ…。」

澄人はそうつぶやき、首をひねった。

「それは嫌だな。君を描いて確かめようと思ってたんだけど、じゃあそれはやめにしよう。」

「確かめないのか？」

「うん。だって、別に僕が神の生まれ変わりだって分かったところで、どうしようもないしね。これ以上崇められるのも面倒だし。」

「さすが天才の言うことは違うな。」

「よく言うよ。今の僕はもう君には敵わないのに。」

でもさ、と澄人は夏淡が口を挟む隙を与えず言った。

「君の口から神って単語が出てきたのは意外だったな。その存在については、ぜひ一度君と話してみたいものだね。まあ君のことだから、そんな非現実的なものは信じてないんだろうけど。」

「当然。神つーのは、人間のすべてを支配するものだろ。いたとしても、ろくな奴じゃねえな。まあ、お前が神なら殺意がわく程度には、信じてない。」

「クスッ、怖いなあ。じゃあ君が神になっても、僕が殺してあげよう。」

澄人は愉快そうに笑った。夏淡も笑った。

その部屋は、実に、穏やかだった。

——友人よ。

あなたは俺が神だったら、本当に俺を殺しますか？
だとしたら…

あなたと笑えなくなる日も、遠くはないかもしれない。

なあ、友人よ…？

33◆神（後書き）

不定期更新すぎますね

なんでこんなに忙しいんでしょう…

またぼちぼち更新します…

34◆月

――月が明るい。

そんなことを思いながら、夏淡はゆっくりとした足取りで澄人の家からの帰り道を歩いていった。

こんなにゆっくりと、月を眺めたのはいつぶりだろう。忙しさに追われ、空を見上げることなどすっかりなくなっていた。もちろん、月を見ることに意味はない。見たところで疲れがとれる訳でもない。それでも夏淡は、月を見ることが昔は好きだった。

澄人には、絵なんて描かなくても人を癒す力がある。

それは、月を見ることが似ていると夏淡は思った。安らぎなんてものは数値にはできない。もちろん脳の検査としての変化は分かるが、そういうものではなくもっと別にある何かだ。そういったものに、澄人も、月も、影響を及ぼすのだ。まるで春の風が頬を撫ぜるように、優しく。

ただ話だけでもこんなに救われるのだ。絵を描いてもらったという妹は、一体どんな気分を味わったのだろう。羨ましいとは思わないが、ただ、その絵を見せてもらえばよかったと思った。

それにしても、澄人は本当に、神に近き存在になってしまったのだろうか。

もし神になったとしたら、自分は本当に彼を殺すのだろうか。

澄人が神だという話は、有り得るのではないかと思う。神というものが存在すればの話だが、澄人のあの人間離れた顔立ちと物言いは、違った何かに見えないこともない。そう考えると、なぜか急に鳥肌がたった。

いや、大丈夫だ。彼は確かに人間だ。前調べた彼のDNAにも、なんら問題はなかった。そう、全く問題、など、な…

「…は？」

夏淡は立ち止まった。そしてしばらく、そのまま動けないでいた。自分の大学一の記憶力を誇る脳がはじき出した答えに、夏淡は理解が追いつかなかった。

「どう、いう、ことだ…？ どこかで見たことがある、と思っていたが、あの女たちのDNAは、澄人と同じじゃなかったか…？」

全身の血が、音をたてて引いていくように感じた。女の顔を憶えるのは苦手なのだが、それでも彼女たちの顔を記憶から引っ張り出す。

その顔は、今まで気付かなかったのが不思議なほど、澄人と瓜二つだった。

「それって、今日話してた、妹のことか…？」

でも、彼女らは。決して普通の人間ではなくて。

「…どうなってんだよ。」

気が付けば、夏淡は大学に向かって走り出していた。自分の記憶が間違っている訳がない。そう分かってはいても、確かめずにはいられなかった。

なぜか胸騒ぎがする。

澄人と彼女らの関係はなんだ？

どうしてこんなにも胸がざわめく。

脳が警戒音を鳴らしているのはなぜだ？

分からないことが多すぎて、夏淡はさらに足を速めた。

34◆月（後書き）

また久し振りの投稿ですね…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8637/>

?Blue Moon?

2011年10月10日13時02分発行